

## 第16回 忘れたところにやって来るもの…

IT生

また、あの日の再来かと身構えた。

11月22日の福島沖の地震。

早朝のラジオから、けたたましく鳴る警報音と各国語の避難呼びかけ。

もしも大事なら、逃げてくれよと、念じながら耳を傾けた。

その日の夕方、知り合いの防災研究者に電話した。

「彼らは逃げたのか」と。

彼らとは、東日本大震災で、あの津波から逃げおおせた3000人の小中学生だ。

岩手県釜石市では、大震災まで8年にわたり防災教育に取り組んできた。その成果として、彼らは命を守り抜いた。私が「逃げたのか」と尋ねたのは、彼らを指導してきた防災研究者だった。答えは「逃げてなかった」。



復興で町が再生する一方防災意識は希薄化する傾向もみられる

復興で町の再生は進み、それにともない生活する人々の顔ぶれも変わり、子供たちも成長する。大震災の時、中学生だった子はもう大学生だ。不断の努力を続けないと、防災意識が薄れていくことを食い止めることはできない。

だからこそ、われわれは歴史に学ぶ必要があるのだ。釜石の子供たちもそうしてきたはずだった。彼らは、先人が残した慟哭の津波の碑を訪ね、手入れすることから始めた。「また、一からやり直しか」と防災研究者はつぶやいた。

彼があきらめない理由がひとつある。

子供たちが走って逃げた、うしろには、走っても津波に吞まれたじいちゃん、ばあちゃんたちがいたのだ。彼らは、走っても間に合わないことがわかっていて、「にげなければ、若い人が迎えにきて巻き添えになる」と杖をついて訓練にも参加していた。

子供たちは、じいちゃん、ばあちゃんたちの気に背中を押されて避難出来たのだろう。こうして考えると、寺田寅彦師が遺した格言「災いは忘れた頃にやってくる」は、単に災害のサイクルのことをいっているのではなく、やはり奥深いものを感じられるのである。

(平成 28 年 11 月)